

書くことを中心とした学習集団の形成に関する研究

A STUDY ON THE FORMATION OF LEARNING GROUP CENTERING UPON WRITING

實成 直美
Naomi JITSUNARI

1. 研究目的

本研究は、学習集団形成に関する今日の課題を検討し、その課題に応えるための学習集団の形成の方法について理論的実践的に明らかにすることを目的としている。

まず、今までの学習集団形成の理論を検討し、その課題を明らかにする。次いで、その課題に応えるための実践研究のための理論と方法を検討し、その理論と方法に基づいた実践研究の内容を報告したい。

2. 先行研究と学習集団形成の課題

今日の学習集団形成の実践に大きな影響を与えたのは、大西忠治と吉本均である。柴田義松は、この両者の理論の両方に言及して学習集団の理論を、今日、提案している。

ここでは、この三人の理論について検討してみたい。

(1) 大西忠治の学習集団の理論

大西は、学習集団は客観的な社会的実在概念であると捉えている。大西によれば、授業には、教科内容、学習集団、授業過程の3つの側面があるが、学習集団の研究はこの三つの側面の中のひとつの側面の研究である。授業がなぜ学習集団で行われなければならないかということの根拠は、学習という労働のもっている集団的性格に求めている。学習集団の指導には、コミュニケーションの指導、組織（グループ編成、リーダーの養成）、規律（きまり、しつけ、習慣づけ、訓練）の3つがある。これらを年間で見通して計画し、実践していくのが、大西忠治の学習集団の形成である。

(2) 吉本均の学習集団の理論

吉本は、学習集団を「みんなでわかりあう授業の創造を目指す教育実践の目標概念である」ととらえている。吉本によれば、授業というのは、教材内容の系統的展開をひとつひとつ学びとっていくことによって、より高次の学習集団として発展していくその一こま、一こまである。具体的な指導方法は、「指さし」「ゆさぶり」「班指名」「時間要求」といった発問と学習規律を中心としている。

(3) 柴田義松の学習集団の理論

柴田義松は、大西の学習集団の理論が学習の個人的性格と集団的性格の間の関係をうまく説明できていないことを指摘して、学習の個人的性格と集団的性格をヴィゴツキーの精神発達の理論を用いて説明している。それによれば、個人が考えるには集団の会話（外言）が必要である。集団の会話を外言として、個人は考える（内言）。個人は考えた内容をみんなの前で発表する。それは、学級のみんなにとっては外言となる。こうした集団の中の会話によって獲得された科学的概念を通して、集団も個人も次の高次の段階に発展していく。授業は、このような意味において、個人が考えることと集団の会話の両方を必要とする。柴田は、また、学習集団の歴史的な性格を指摘している。

本研究は、以上の三人の学習集団の理論の検討を通して、学習集団形成の課題を次のように考えた。

(1) 学習集団の歴史性について

学習集団づくりは、当初は、全員発言、全員参加、どの児童も学習主体にすることを目指した。どんな児童

も授業に参加することは、今日も以前にもまして、求められている。今日は、学級に特別な支援を必要とする児童がいることは珍しくない。特別な支援を必要とする児童も、同じように授業に参加でき、学級全体で思考を深めなくてはならない。そのような学習集団形成の方法が求められている。

(2) 学習集団と言葉

私たちは言葉を使って考えている。授業の中において、集団で討論する時も言葉を使って討論している。しかし、これまでの学習集団の指導で最もよく用いられた発問については、次のような課題があると考えられる。

- 1 発問は、児童を受け身にするということである。発問を中心にした授業では、授業において児童は、教師が発問することを待つようになる。
- 2 発問を中心とした授業では、応答者がどうしても上位の児童に偏りがちである。
- 3 全員挙手しても、どのように分かっているかは、一人ひとりの児童によって異なるが、挙手だけ見ても、分からない。

これらのことから、本研究では、特別な支援を必要とする児童も授業に参加でき、安心して発表でき、応答でき、また、一人ひとりの児童も成長し、学級全体としても成長する学習集団形成の方法として書くことを中心にした学習集団形成の方法を明らかにすることを課題であると考えた。

3. 研究の視点と方法

授業の中で書いて考えるのは、一人ひとりの児童である。それが学級のみんなの前で発表された時から、推進力は学習集団のほうに移る。学習集団における討論は、今度は、一人ひとりの児童の思考に内言化される。学習集団のほうは、討論で形成された共通の認識をもとに発展する。

このように、個人の学習と学習集団の討論をつなぐものとして書くことを位置づけた。書くことは、教室におけ

るすべての書く活動を含めるが、中心的にはノートである。教師の発問に対して自分の考えを書く、見たこと、聞いたことについて書く、まとめや感想を書く、調べたことを書く、これらの書いたことをみんなの前で発表する。これらを繰り返しながら、最も効果的な書くことを中心とした学習集団形成の道筋を明らかにしてみたい。

この指導を通して予想されることは、次のことである。

- ①児童は、ノートに自分の考えを書いているので、自信を持って、みんなの前で発表しやすくなるであろう。したがって、発表の声が大きくなったり、発表の数が増えたりするだろう。書く文章の長さも次第に長くなるだろう。
- ②学習集団の側からは、一人ひとりの考えがよく分かり学級全体の共通の認識が形成されて学級全体の連帯が高まるであろう。
- ③教師の側からは、ノートや作文を通して、児童が本当に分かっているか、一人ひとりの児童の思考がよく分かり、分かっていない児童の指導を適切に行うことができるようになるであろう。

検証の方法については、次のように考えた。

- ・一人ひとりの児童のノートの分析によって、成長の跡を分析する。
- ・児童が自信をもって発表しているかについては、観察をもとに検討する。
- ・この実践によって学級全体の連帯が高まっているかについては、児童へのインタビューによって検証する。
- ・授業後の休み時間の児童の様子を観察、教師と児童児童相互の関わりの信頼関係の変化によって検証する。

4. 実践の一般的経過

7月から書くことを中心にした学習集団の形成について研究することを決めたが、4月から書く活動自体は行っているため、ここでは4月からの実践を含めて説明する。

4月～7月 資料を見て、わかったこと、気づいたこと、思ったことを書く実践

7月～1月 スピーチ原稿を中心にした実践

4月～1月 視写の「10分間スピードチェック」を中心とした実践

9月 まとめを書く実践

10月 見たことを書く実践

10月 学習の振り返りを書く実践

10・11月 理由を書く実践

10・11月 消防署新聞

10・11月・12月・1月 予想やまとめを書く実践

10・11月・12月 気づいたことを書く実践

11月 やり方を書く実践

11月 調べたことや自分の考えを書く実践

12月 キャッチコピーを書く実践

12月 生活の振り返りを書く実践

5. 実践の個別的な取り組み

次に実践の個別的取り組みについて説明する。

(1) ノート指導

教師の発問に対して自分の考えを書く、見たこと、聴いたことについて書く、まとめ、感想、調べたことを書き、これらの書いたことをみんなの前で発表する活動を行ってきた。まずは、書けることからノートに書くようにさせた。自信のない児童は、最初は書いたものを隠そうとしたり、なかなか書こうとしなかったりする児童もいた。そんな時は、机間指導しながら、書けている児童の内容を一部読み上げ参考にさせたり、わずかでも書いている内容を称賛したりすることから、書くことに対する抵抗感をなくすようにした。また、よく文は書けるのだが、指定した時間内に書くことが苦手な児童もいたので、文を書くスピードを少しでもはやくなることと、文を書くことに抵抗をなくするために、視写を定期的に行うようにした。視写のめあては、できるだけいねいに、はやく書くことである。

ノートを書かせ、机間指導をしていく中で、児童のよりすばらしい考えを見落とさないように心がけた。いくらすばらしい考えが書けていても、内言のまま終わってしまうと、学習集団として集団の高まりがない。児童は、自分のすばらしい気づき、考えに気づいてないことも多い。特に、討論活動の際には、討論を深めるために、いつもノートをよく見て机間指導を行った。

(2) 発表の指導

① 発表する声を大きくする指導

担任した児童は、1年生からの積み上げがあり、発表の基本的なスタイル（立って発表する、名前を呼ばれたら「はい」と返事をしてから発表する、語尾に「です。」をつけるなど）はどの児童も身につけていた。しかし、一番の問題は、発表する声が小さいことだった。声が小さくては、いくら、全体の思考の高まりのある内容が書けていても全体に伝わらない。そこで、自分たちの発表の声の大きさがどのくらいのものか気づかせるために、声のものさしを利用することにした。この声のものさしは、A小学校全学級で掲示され、児童は入学時から目にしてきたものである。しかし、日頃から見ているものの、実際に自分の声の大きさがどのくらいなのかを気づかせるために、児童の発表後に、聞いている他の児童に指番号で、声のものさしの番号を知らせる活動を定期的に行った。この活動により、今までは、教師に聞こえればよいという意識で発表していた児童も、学級全体を意識した発表へと変わっていった。

② 発表スタイルの指導

声のものさし同様、発表スタイルがA小学校全学級で掲示されている。「はい。～です。」「理ゆうは、～です。」のように、～の部分に自分の考えを入れて発表できることから、児童が発表ス

イルを迷わず安心できた。また、聞いている児童も聞き取りやすいことから、発表スタイルを徹底して取り組んだ。

③ 自信をもって発表させる指導

発表の声が小さいのは、自分の発表する内容に自信がないことである。これを解消するために、発問と応答が中心だった授業スタイルから、発問に対する自分の考えをまず、ノートに書き、隣や班でノートに書いた内容をお互いに交流してから、発表する方法を多く取り入れた。また、1時間のうちに班で全員発表を目指し、メンバーが全員発表できたら、班の中の勉強長が「〇班全員発表しました。」と報告し、黒板に小さく班番号を書き、班ごとに競わせる取り組みをした。先ほど、述べた隣や班でノートに書いた内容をお互いに交流してから、発表することが多いため、班の中で「これは発表したらいいよ。」などと、友だちからのアドバイスもあり、いつもより声の大きさも大きくなった。

（３）討論の指導

討論では、成績上位者や一部の積極的に発表する者のみが活躍する討論ではなく、学級にいる全員が少なくとも1度や2度は発表できる討論を目指す上で、発問に対する答えをAかBを選択できるようにし、その選択したものの理由をノートに書くように指導した。児童には、理由を書く時には、「～だからです。」とだからという言葉を書くようにした。発表の形式は、まず、AかBのどちらかを選択した児童に聞き、少数派の考えから選んだ理由を答えさせるようにさせた。また、発表者は、挙手により教師が指名するのではなく、指名なし発表とした。指名なし発表では、発表者が起立し、起立した発表者同士が重なっていなければそのまま発表できる。もし、同時に起立した場合は、「お先にどうぞ。」と譲り合いをしたり、「先に発表してもいいですか。」と自己

主張したりするようにした。それでも、どちらが先に発表するか決まらない時は、発表回数の少ない児童、書いている内容が少ない児童を優先的に発表できるように、学級で約束を決めて取り組んだ。指名なし発表とすることで、書くことや発表が苦手な児童も自分の好きなタイミングで発表ができた。互いの考えを選んだ理由が一通りでたところで、いよいよ討論が山場をむかえる。討論をより深めるために、友だちの発表の中から児童は「これは！」と思った内容をノートにメモをとらせ、次への発表の手がかりにさせた。

（４）書くことや発表が苦手な児童の指導

まず、書くことへの抵抗感をなくすため、資料（写真）を見て、わかったこと、気づいたこと、思ったことをノートに箇条書きするなど、書いたことに不正解がないような取り組みから始めた。思ったことを書いてもよいとすることで、自分が思ったことなので、友だちとの比べようもなく安心してノートに書くようになった。机間指導しながら、書けている児童の内容を一部読み上げ参考にさせたり、わずかでも書いている内容を称賛したりすることから、書くことに対する抵抗感をなくすようにした。発表は、箇条書きで書いた個数や行数が少ない児童から発表させた。この方法は、書けていない児童には、劣等感を与えているように思うかもしれないが、そうではない。誰からでもいいから、発表してもよいという形式にしたら、書いている量の少ない児童は、先に、その考えを友だちに発表されたら、発表できる機会が少なくなる可能性があると考えた。そのことを防ぐために、この発表形式をあえてとった。そして、少しでも書いたり発表したりすると、しっかり褒めて、自己肯定感の向上に努めた。

また、できる限り、休み時間、一緒に過ごすようにした。休み時間には、授業時間では見られない表情を見せてくれる児童も多い。一緒に遊ぶことで、今

まで知らなかった一面が見られたり、困っていることや興味があることを話してくれたりし、信頼関係の構築に努めた。

（５）学習集団の指導

児童が考えた内容をみんなの前で発表すると、学級の全体にとっては外言となる。まず、一人ひとりが自分の考えをノートに書き、発表させた。その後、友だちの発表に対する自分の考えをノートに書き、再度発表するように取り組んだ。友だちの発表を聞くことで、自分だけでは気づけていなかったことにも気づくようになった。また、友だちの発表をただ聞くだけでなく、聞いた後に、友だちの発表を聞き、どう思い・どう考えたかを書くことでメモをとりながら友だちの発表を聞く児童もでてきた。

また、この学習活動を始め、１時間の授業で少なくとも１度は全員が発表することから、休み時間の児童の様子に変化が見られた。１学期は、教師の働きかけなしには、休み時間になっても全員が外に出て遊ぶことはなかったが、この学習活動をはじめてからは、何も言わなくても全員外で遊ぶようになった。遊ぶ内容も個人遊びや自由遊びではなく、全員遊び（おにごっこ）を好んでするようになった。全員遊びをしてみると言っても、そこは、小学４年生、毎日仲よく遊んでいるわけではない。もちろん、喧嘩は起こる。お互いの言い分を双方好きのように言っていたのでは、おさまる喧嘩もおさまらないので、自分のやったこと、されたこと、見たことなどを正直に紙に書くようにさせた。普段の授業から書くことには慣れていたので、書き始めた。喧嘩をした友達とは離れて書いているので、書いているうちに、気持ちも治まり、冷静に自分自身を振り返り、書き終わるころには、児童自身で喧嘩の解決方法を見つけ出し、実行しようしていた。

６．研究の成果

本実践の結果を要約すると、次のようなものである。

（１）書く力がついたか

児童３０人中、１４人の児童が、書く行数がふえた、字を書くのが好きになった、感想や文を書くのがすらすらと書けるようになったという理由から、書く力がついたと述べている。今後は、書く力がついたらと実感できる児童数を増やすことと、書く内容の質の向上が課題であると考えている。

（２）討論はどのように変化したか

児童３０人中、１２人の児童が意見を言うのが楽しくなった、自分から進んで発表できるようになった、みんなで話し合っていくと大逆転の展開になることがあって楽しいという理由から、討論が上手になったと述べている。その一方で、討論となると、自分が発表したことへ意見がかえってくることから、討論に自信の持てない児童はまだ多い。ただ、この実践を進めていくにつれ、お互いの考えを言いっぱなしの一方通行の討論から、根拠に基づき、お互いの考えの積み重ねある討論へと変化してきた。

（３）学習集団はどのように育ったか

児童３０人中、２０人の児童が、学級全体がよく発表するようになった、雰囲気が何か違う、みんな発表する声も大きくなったという理由から、よく勉強するようになったと述べている。発表に抵抗なくできる児童が多くなった。

（４）書くことや発表することに苦手な児童はどのように変

化したか

児童３０人中、２２人の児童が今までは、１、２回ぐらいの発表の人が３、４回発表するようになったなどの理由から、書くことや発表することに苦手意識のあった児童も積極的に発表するようになったと述

べている。友だちの発表を真剣に聞き、学級のみんなが発表しようという雰囲気もうまれた。ある保護者の方からは、こんな嬉しい言葉をいただいた。「今まではすぐに疲れた、学校がおもしろくないと言い、ちょっとしたことで学校を休みたがっていた子が、2学期になって、学校に行くのが楽しみと言っている。こんなに嬉しいことはありません。」

（５）教師と児童の人間関係

児童３０人中、２８人の児童が今まであまり話をしていなかった人と話をするようになったなどの理由から、児童相互の人間関係、教師と児童の人間関係が良くなったと述べている。児童の休み時間の様子が変わり、何も言わなくても全員外で遊ぶようになった。遊ぶ内容も個人遊びや自由遊びではなく、全員遊び（おにごっこ）を好んでするようになった。１時間の授業で少なくとも１度は全員が発表することから、休み時間にも児童の様子に変化が見られた。

これらの結果から、書くことや発表することが苦手な児童も意欲的にどの授業でも取り組むようになり、また、討論を通じて、学級全体の思考が高まり、個人の思考も深まった。書くことを中心として学習集団を形成しようとした本研究の目的は、まだまだ多くの課題は残っているものの達成されたと考える。

本研究の独自性

学習集団の形成は、これまで大西忠治や吉本均の理論に基づいたものは数多く実践されていた。本研究は、理論的には柴田義松の提案する内言と外言の理論を用いているが、書くことを中心とし、その中心をノートにおき、ノートに書いたものを発表し、交流し、討論し、さらにそれをもとにまた書かせるというサイクルを継続し、学習集団を形成する方法は本研究の独自なものである。

引用文献

- (1) 青木幹男『第三の書く』国土社 1986年 p.56
- (2) 『うつしまるくん4年標準版』 光村教育図書 pp.4・8
- (3) 向山洋一監修 師尾喜代子編著『どの子も書く意欲 モリモリ イラスト作文スキル 中学年』 明治図書 2004年 pp.40～41
- (4) 『小学校 国語科聞く力の評価と指導 すぐに使える評価テスト』 明治図書 2007年 pp.14～17 pp.70～73
- (5) 『理科の授業づくり入門』 編集委員会編著『理科授業作り入門ー玉田泰太郎の研究、実践の成果に学ぶー』 日本標準 2008年 p.471
- (6) 『みて みて つかって！ 男女共生教育教材・実践集』 岡山県教職員組合教育運動推進センター・男女平等教育研究部会編 2008年 pp.15～18 pp.51～54

参考文献

- ①大西忠治『学習集団の基礎理論』 明治図書 1981年
- ②『大西忠治教育技術著作集7 授業と学習集団の指導技術』 明治図書 1991年
- ③吉本均『学習集団づくり入門』 明治図書 1969年
- ④柴田義松『批判的思考力を育てるー授業と学習集団の実践ー』 日本標準 2006年
- ⑤岩崎秀樹『数学教育学の成立と展望』 ミネルヴァ書房 2007年